

東京大空襲の惨状を見て決意した ことが三年間の捕虜生活となった

宮崎県 田代 香

第一章 出生とその後の状況

一、出生から入隊まで

大正八（一九一九）年七月一日、宮崎県宮崎郡木花村大字熊野で、九人兄弟の二番目として生まれる。木花尋常高等小学校を卒業後、宮崎農学校を卒業。さらに朝鮮大邱師範学校に学び、卒業後一カ年間、小学校で教鞭をとり、昭和十四（一九三九）年四月一日、師範学校卒業生にのみ与えられていた、最後の短期現役兵制度の現役兵として入隊。途中で幹部候補生を志願し、多くの志願者の中から四人が甲種幹部候補生に選ばれ、昭和十三年徴集の幹部候補生の教育に合流。

なお、男兄弟五人中、長男は昭和十五年、広島

電信隊に召集され、以降中支に進駐し、さらに桂林作戦に参加、九死に一生を得て、昭和二十一年に復員。弟は、昭和十九年海軍に志願して、終戦時は鹿児島県内で勤務していたため、三人のうち一番最初に復員している。

二、軍隊関係

昭和十四年一月九日付で、慶尚北道知事から短期現役兵身体検査の通知を受け、同年二月五日、京城龍山偕行社で受験結果は「甲種合格」であった。以来九年間、実に変化に富んだ軍隊生活であった。

第二章 渡満の経緯

一、東京大空襲

昭和二十年三月九、十日の東京大空襲時、私は東京日赤中央病院に入院していた。幸い病院は空襲から免れたので、夜明けを待って、東京の街に出て見た。何と、この焼夷弾攻撃により、大東京

は一夜にして焼野が原と化してしまったのである。

私は、この無惨な光景を目にしたとき、「俺は不名誉な負傷によって入院しており、かつ、多くの人の血によって生かされている命である。これ以上病院に入院していることは許されない」と決心し、その足で市ヶ谷の陸軍省に行き、「自己退院するので、ぜひ南方戦線に派遣してくれ」と嘆願した。係官（少佐）は、貴官の負傷では戦地では無理だから、郷土防衛のため宮崎に帰り、敵の上陸に備え戦えと言われたが、この負傷の身では郷里には帰れないと懇願した。係官も私の熱意にほだされたのか、「それでは一応仙台飛行学校に帰っておれ」とのことであったので、喜び勇んで病院を自己退院し帰校していた。ところが四月上旬、「陸軍航空士官学校付を命ずる」との命令である。あれほど南方戦線派遣を願っていたのに、またしても東京かと残念でならなかったが、命令には従わざるを得ない。

四月下旬、不通となっている池袋駅から歩いて航空校に着任したが、着任してみると、敵の航空母艦から飛来する戦闘機のため、航空士官学校は操縦教育ができなくなり、四月から操縦及び無線の候補生（五九期生）は満州各地の飛行場に分散し、教育訓練を行っているということであった。

私は五月上旬、単身赴任で満州牡丹江省海浪の第二生徒隊本部に着任した。ここには第二五中隊（操縦）、第二八中隊（無線）が駐留し、訓練に励んでいた。私は第二生徒隊本部の飛行科付として勤務することとなった。

二、ソ連の侵攻

昭和二十年八月九日午前三時、上級司令部から「ソ連侵攻」の緊急電話が入った。私は当日、本部の週番士官として勤務中であつたので、直ちに第二五中隊の安藤少佐週番司令に報告し、直ちに非常呼集を行い、臨戦態勢を整えた。

日・ソ間の不可侵条約を破り、満州、北方領土

に一方的に侵攻して来たことは許されざることであり、昭和十六年の独ソ戦争開戦時のこと、すなわち関東軍特種演習のことが思い出された。

戦闘態勢は整えたが、十二日に至り、航空士官学校は非戦闘部隊のため、南滿の通化飛行場に転進することとなり、地上勤務者は列車で、士官候補生は練習機を教官が操縦し、候補生二人を乗せピストン輸送を行った。しかし、二五中隊十七人の候補生が残り、私は、生徒隊長立山大佐、先任教官下山中佐の飛行機を、兵器科の兵員とともに飛び立たせ、本部及び兵器科兵員、軍属、士官候補生十七人、及び学校本部の全車両の後発隊長を命ぜられ、第二五中隊長から、全候補生が任官時に佩用するであろう、日本刀及びその他雑品、下山教官の将校行李等を預かり、十二日の午後、学校を出発した。

海浪駅前で全車両の点検を兼ね小休止をした。駅に多くの無蓋貨車に、悲壮な面持ちで多数の将兵が無言のまま乗車している。私が、どこの部隊

かと聞いたところ、「石頭陸軍予備士官学校の候補生（一三期生）で、これから第一線に向うところだ」と言う。私は、同じ士官となる航士校の生徒は後退し、予備士官学校の生徒は負け戦の最中に行かなければならない、この現実を見て実に複雑な心境であったが、「武運を祈ります」と告げて出発した。あのときの思いは今でも私の脳裏からは消えることがない。

十二日夜は、第二三中隊が分散教育を受けている温春飛行場に一泊し、明日から山岳道を突破するための英気を養った。士官学校の車両は、酸素発生車をはじめ重車両が多く、また始動車類のボディーの低い車等も多く、その行動は思うように進行しない。

私は、昭和十六年三月から東京城で新設部隊を編成し、駐留した経験があるので、これからの山岳道は一応承知していたが、連日の雨のため、また車両通過が多いため道は泥道と化し、このため、車に積んでいた荷物類は、最少必要品だけ携

行を許し、他の品はすべて鏡泊湖の水中に投げ捨てた。第二五中隊長から預かっていた候補生の日本刀も下山先任教官の将校行李もすべて湖底に沈め、全車両身軽にさせ、一刻も早く山中の悪路から脱出するよう、陥没車両を引き揚げながら、夜は車中で仮眠しての行軍である。

十五日に至り、十七人の士官候補生は早朝から徒步行軍で敦化飛行場へ先行させた。もちろん終戦のことは知る由もない。十八日に至り数台の車を放棄し、疲労困憊の末ようやく沙河沿飛行場に着き、終戦を知り、無念の涙が流れた。

三、武装解除

昭和二十年八月十九日午後、急にソ連軍から、「全兵器、全車両を敦化飛行場に集結」を命ぜられ、すべて武装を解除され、兵員は一定の鉄条網の張りめぐらされた中に集結させられた。しかし、沙河沿飛行場には車両運転者以外の兵員を残しているの、夜に入ってから警備兵の目を掠め

て脱走し、河を渡り、翌朝沙河沿飛行場にたどり着き、無事を喜び合った。

四、ソ連の捕虜となる

沙河沿飛行場に東満各地から将兵が集められた。大尉級を大隊長に、下士官、兵、千人単位で各地に作業隊として送り出され、終戦まで満人クリー達が起居していたアンペラー小屋に少、中尉全部が集められ、中隊区分に編成され、私はこの少、中尉集団の第五中隊長を命ぜられ、大隊長は山田少佐であった。

九月に入って、沙河沿から牡丹江まで暑い中を、一週間かけて徒步行軍で移動することとなった。大隊長の山田少佐が高齢のため、大隊長代理で、この烏合の衆の集団の指揮には大変苦労した。途中雨にも遭ったが、給与らしい給与もなく、水は川の流れ水を水筒に入れ、大事に補給した。ある日、水汲みに行った川の中に婦人の死体が沈んでいた。肉体は腐っているのであるが、長

く伸びた黒髪が水の流れるままに流れている。ここまで「日本に帰りたい」の一心で来たのに、喉の渴きを癒すためたどり着いた川の中で、水を含みながら絶命したのであろう。この哀れな姿は、一生、私の脳裏から消えることはない。

苦しかった一週間の行軍も、牡丹江市の東の掖河の旧日本軍の兵舎に落ちつき、人間らしい生活に返った。

五、一カ月の貨車の旅

掖河の駅で、日本に帰る列車の準備を始めた。旧満鉄の貨車に二段または三段の床を作り、片方の扉は約十五センチくらい開けて固定し、そこから腰の高さよりやや低いところから斜めに約十五センチ幅の桶をつけ、ここから大小便をするのであるが、すぐ横では戦友が寝ているのである。ドラム缶の片方を切り、ストーブの代用である。若干の石炭と薪を積み込み一つ東の愛河まで歩き、昭和二十年十一月二日、「ダモイ東京」のコン

ポイの声に踊らされながら車上の人となった。しかし、一向に動かない。十一月三日午後、いよいよ発車した。思わず「バンザイ」の歓声が沸き起こった。

ソ満国境の町、綏芬河を通過しソ連領に入った。朝になり、素掘りのトンネルを幾つか通り抜け、列車は東進しているはずである。ところが列車は西進しているのではないか。「またしても騙されたか」と地団駄を踏んだが、後の祭りである。

ソ連の十一月はもう実に寒い。車内はドラム缶の暖炉一個である。ウオン、ウオンと、まるで猛獣の叫び声にも似た汽笛を発しながら、吹雪の荒野を西進する。一日中進んでも駅らしい駅はない。そうなると、食糧の補給も水の補給もない。毛布一枚、防寒外套にくるまって一日でも二日でも寝ているしか仕方がない。

何日目かに、イリクーツクの駅に着いた。ここでは一日中停車し、食糧、燃料、水の補給をし、

車外に出て用便も済ました。しかし目的は、体や衣類に付いた蚤、虱、南京虫の駆除が目的であった。革製品の靴やベルトは各人が持ち、他の衣類は金輪に通し熱気消毒室に入れる。その間、人間は浴室に入り、洗面器一杯の熱湯をもらい、衣服の消毒が終わるまで入浴である。出口で腋毛と陰毛もロシア人の看護婦が剃ってくれるのだが、切れの悪い剃刀で次々と剃るのには閉口した。同様な入浴が、ノボシビルスクでも行われた。

一カ月間にわたる苦勞の多い長旅であったが、その間、不思議にも一回も普通の列車には遭遇しなかった。出会うのは有蓋貨物列車ばかりであり、軍用列車が多かった。この軍用列車には、必ずと言っていいほど、夜鷹（慰安婦）が乗り込んでいて、停車駅で次の車両に乗りかえて稼いでいたようである。私は最後まで大隊長代理をしており、ハルピン学院出身の高橋少尉が通訳として付いていたので、いろいろとソ連との交渉その他、ソ連人の会話のおもしろい内容も聞かせてくれ

た。

昭和二十年十一月三十日、苦しかった一カ月目の貨車の旅も終わった。いよいよ下車となると、二千人の将校集団であるため、あるいは全員処刑されるのではないかと心の動揺も禁じ得なかった。

六、ラーダ収容所に収容（ロシア共和国）

深雪の中をただ黙々と歩き収容所に着いた。寒さの中、門前での人員の引き継ぎに長時間を要し、ソ連兵の頭の悪さをつくづく感じさせられた。収容所は、外側に幾重にも鉄条網が張りめぐらされ、番犬が鉄線に環で繋がれて警戒しており、四隅の一段と高くなった望楼には警備兵が銃を構え警戒している。

宿舎は半地下式施設で、丸木床の丸木小屋で、床は二段床が多かった。暖房は奥まったところに一カ所、ペーチカがあるのみである。この収容所は元ドイツ軍が収容されていた施設で、まだ多く

のドイツ人及び他の外人捕虜もいた。

私達航空士官学校関係者は、村井少佐の率いる航空情報隊を主とした隊と一緒に、第七四号舎に落ちついた。私は夏用の軍服であったので、大変な寒さを感じた。後日、ソ連から、藁布団、敷布、枕が貸与された。

魔の三七号舎。一カ月にわたる貨車の旅と給与の悪さから疲れ果て、十二月から三月にかけて病人が続出し、医務室病棟か保育棟に移される者が多かった。医務室病棟で満足な治療を受けられないまま、無念にも異郷の地で他界した者も多かった。ソ連は、死者に国の財産である被服を着用させておく必要はないと、丸裸のまま、凍った遺体を蚕棚のような棚に差し込んだまま一冬を過ごしたのである。死んだら一個の物体としてしか取扱わない国、これがソ連である。途中から日本の抗議により、被服だけは着用したまま棚に積み込まれていた。冬は大地は凍てついているため、埋葬

の穴を掘ることができない。

春になり、凍てついていた大地に穴が掘れるようになってから、遠くの山林奥地に大きな穴を掘り、夜間、トラックで死体を運び出し、この穴の中に投げ込まれて土葬されたのである。この一連の作業は外人捕虜が当たり、日本人の目には触れさせなかった。今、その墓地がどこにあるのかわかる人はいないであろう。

冬の凍土の中で慰霊されることもなく、今なお寂しく眠っている戦友を思うと、断腸の思いがする。

昭和二十一年四月二十二日、新たな将校集団が到着した。北千島派遣部隊の陸・海軍の将校五百五十人である。日本に帰れるということで乗船し出港したのであるが、それがシベリア本線に乗せられ、我々以上の苦労を重ねての到着である。おかげで、我々が抱いていた帰還の夢も破られてしまった。

六月一日、いよいよ本格的な重労働が始まっ

た。毎朝五時集合、片道十五キロメートルの道程を行軍し、九時に現地着、タンポフに通じる道路建設である。九時から十七時までには、昼食の一時間の休みがあるのみである。幸い六月で野草が芽生えてきたので、食べられそうな野草をとって食べた。野草のゴボウが沢山あったので食べたが、コンボイは、ゴボウは頭が悪くなるから食べないようにと言った。しかし空腹にはかえられない。木陰一つない炎天下の重労働も六月末で終わり、やっと一息ついた。

棒秤（ボウバカリ）の効用

食事のことでは、どの宿舎でも動物むき出しのトラブルがよく起きた。特にパンの配分については、大・小や耳の部分の争奪がひどく、食事当番となった者は、パンの切り方にも細心の注意を払う作業をせねばならなかった。このような状況の中で、名前は失念したが、一組の棒秤を考案作成した者がいた。分銅は煉瓦を削り、三百グラムの重さの物を作った。これで一個の黒パンも大体同

じ重さとなるよう加減し、分配も毎日順位を変えて配分するようにした。これによりパンの配分についてはトラブルは起こらないようになった。食に対する執念は実に悲しいものである。

昭和二十一年七月三日、全員の呼名点呼が行われた。午後になって編成の改編があった。大尉、中尉はすべて第七三号舎から第七七号舎に移され、加えて全員入浴を済ませ、いつ出発命令があっても出発できるようにとの総隊長からの命令があった。先般、千島部隊が到着して間もない時期である。不吉な予感もしたが、日本帰還へと話題をかえ待機していた。

七月十七日、午前六時から呼名点呼、引き続き厳重な私物品の検査が行われた。昨年十一月、雪に埋れたラーゲルでの生活、飢と寒さと道路建設の重労働、そして生命に対する限りなき不安、今度もまた「ダモイ東京」の言葉に踊らされながら二段装置の貨車に乗り込んだ。しかし、異常なまでにコンボイの警戒が厳重である。

七月十八日、乗車して丸一昼夜、十八時に列車は動き出した。しかし、東方に向かってはいるではないか。一斉に「バンザイ」の歓声が起こった。

二度と訪れることのないラーダ。しかし、遠い原野に埋葬されている戦友達を思うと、一瞬、彼らの在りし日の面影を思い浮かべ、窓の隙間から外を眺め、別れを告げたのである。

七月二十三日、ラーダ出発から六日目、列車が停車し、全員起こされた。午前一時であった。車中の給食はすこぶる悪く、それでも日本帰還を信じていたものを。三分の一食事を済ましていたところ、不意に「各自防寒外套・飯盒・水筒のみを携行して下車せよ」との命令である。全員ただ啞然。ロスケの野郎またしても騙したかと思うと、腹が立ってしようがない。思い思いに残りの荷物をまとめて置き、十時にキズネール駅を出発した。

これから八十キロメートルを行軍し、目的地に行くことを知らされた。かんかん照りの真夏の暑

さ、加えて水の補給がほとんどない。落伍者が多く出たが、これを助ける余力はない。途中、ドイツの捕虜達と出会う。我らもまた彼ら同様重労働につかされるのであろうと思うと、一層足が重くなる。

二十三日、二十四日、二十五日と野宿を重ね、二十六日は途中雨に降られながらも収容所にたどり着いた。

七、「エラブカ収容所」に収容（タタール自治共和国）

昭和二十一年七月二十六日、途中雨に降られながらも、十四時、多くの落伍者が出たがエラブカ収容所に到着した。当日は体の消毒ができなかった。所内での露営であった。建物は元刑務所の跡で、赤煉瓦造りの建物であり、他に木造建物二棟と、中央部に便所棟があった。煉瓦棟には、佐官クラスに給与中隊及び体力の弱っている者が優先的に入室していた。

先着部隊を合わせ四千人の大集団である。ここでは野外食堂で食事をすることとなったが、二カ所のお粥、ポーチカ（樽）の底の部分、すなわち、お粥が冷えていて若干固くなった部分が当たったときの嬉しさはまた格別。しかし、飯盒の底が見え出したときのむなしさは、何にたとえようもない心境である。

身体検査、労役に服するための体格検査が行われた。一級・二級・三級と病人とに区分される。

一級は重労働、二級は普通労働、三級は軽作業と区分されるが、作業によってはこの区分も余り役に立たない。検査はポリバ、大尉（女性四十歳台）の前に全裸体で立たせ、顔色、血色を見、最後に後ろ向きとさせ尻の皮をつねってみて、通訳を通して等級が告げられるのであるが、ポリバ、大尉も女性である。男性のブラリと下った性器を見つめ苦勞であると思い、そして彼女の赤い口紅が目にしみたひとときであった。この格付検査

が一定期間を置いて行われた。

給与の実態

エラブカでは給与棟もあり、一応安定した給与が行われるようになった。私は負傷しており、身体検査では三級が多く、おかげで途中から給与中隊に配置され、勤務は深夜作業も多く苦しかったが、冬でも室内作業で助かった。

八、教化隊（刑務所）入り

昭和二十二年六月十一日（水）。最近まで防寒外套を着て農作業をしなければならなかった天候も、ここ二、三日は真夏のような暑さである。農作業もいつ終わるとも知れない。

本日、悲しいことが起こった。同僚の工藤大尉が、ソ連より教化隊（刑務所）入りを命ぜられたのである。工藤大尉は先般、森林伐採の作業隊の責任者としてボルショポールに派遣されていたのであるが、余りの給与の悪さに抗議のため、全員が一時サボタージュをしたのである。この責任を

問われ、隊員の責任を自分一人でとり、教化隊（Bラーゲル内）入りとなったのである。まことに同情にたえない。どの程度の期間、どのような苦役が科せられるか不明である。今まで「日本新聞」関係者や同調者から密告され、教化隊入りを命ぜられた者はおったが、サボタージュの責任を問われての者は初めてである。十五時、宿舎に行き、非常食にと持っていた乾パンを与え、命を大事にするようにと言って別れた。

九、特掃班のこと

収容所の便所は中央部に一カ所、木造の建物があり、深く掘り下げた便槽の上に板の床があり、中央部は五十センチ程度の高さの、大小便分離用の板壁で仕切っている。大便の方は床板に適当な間隔で楕円形の穴が開けてあり、隣の人と触れ合う程度のため、隣人と昨日の作業のきつかったこと、今日の作業のこと等を話しながら……。しかし、朝は前に次の人が並ぶ混雑である。暖かい時

期は、便の汲み取りは汲み取り口から容易に汲み取れるが、冬は大変である。大小便共に瞬く間に凍ってしまう。そこでこの特掃班の連中は、便槽の中に入り、ツルハシで碎いて運搬用ソリに積み込み、日に何回か繰り返しこの作業を行っている。この作業班の希望者は多かった。理由は、特掃班には二人分の食事が与えられたからである。

十、待望の日本からの来信

昭和二十二年七月一日、今日は小生の二十九回目の誕生日である。またしても惨めな姿で、誰一人祝ってくれる人もいない。七月というのに外套が必要な寒さである。本日午後、待望の日本からの手紙が届いた。半信半疑で書いた捕虜通信であったが、A・Bラーゲル合わせて四百五十通、Bラーゲルだけで二百五十九通届いたようである。残念ながら小生の誕生日には来なかった。しかし、皆見せ合い、日本の様子が知れ喜び合い、かつ安心した皆の表情であった。

十一、「ダモイ東京」

何回口にし、また、何回騙されたか知れない日本帰還の噂がいよいよ現実となり、九月に入って第一陣が出発して行った。私は給与中隊にいたので、最後から二番目の出発となった。ボルガ河上流のこのエラブカ收容所、いろいろの思いがあるが、キズネール駅までの三泊四日の行軍も帰還の喜びでさほど苦しくもなかった。変化があったのは、コンボイの警戒もさほど厳しくなく、今度こそ本当に「ダモイ東京」であろうと実感した。

ナホトカ港に着いた。十一月のソ連はもう実に寒い。收容する建物は限られている。各地から集まった集団で幕舎にも入れなかった者のうち、ある朝、今までに体力、気力共に消耗し尽くしてしまったのか、二人の者が凍死していた。乗船を直前にしての悲しい出来事である。

乗船まで一週間余り、いわゆる民主グループと称する連中が、連日民主教育を行っている。「将校は前に出る」「資本金、社長は前に出る」毎回

全員土下座のまま、強い調子の彼らの話を聞いている。彼らの言う「天皇島上陸作戦」の第一歩がいよいよ実現した。

寒さと闘い、重労働に耐えながら、日本帰還に望みをかけてきた三カ年近い歲月、いよいよ日本船に乗り込んだ。まぎれもない日本人の船員さん、白衣を着た看護婦さん達の「お帰りなさい、ご苦勞様でした」と言うねぎらいの言葉を聞いたとき、とめどもなく涙が流れ出た。船は恵山丸であった。

十二、付記

捕虜となり、ある程度落ちついてから、将校に對しては一日十五本の煙草が支給されるようになった。私は煙草を吸わないので、煙草は戦友に分けてやり、巻紙だけをためておき、これを、トラックのシートをほどいた糸を針金で通し、煙草の入っていたマホルカの包装紙に、ワイシャツの下の方をちぎって張りつけて表紙とした手帳を

作った。書物は一切禁止されている中で、部下のことや住所等を記録していたが、その後は人目を避け、または夜間勤務のときなど、気の向いたときに記録しておいたものである。毎回の検査では何とか隠しおおせたが、帰還時のナホトカでは防寒外套の折り返しの中に潜ませ、無事通過した。もしナホトカで発見されたら、十年間は刑務所入りであっただろうと今でも思っている。

六十万人近い捕虜帰還者のうち、内容的にはつまらないものであるが記録として持ち帰った者はいないであろう。この手帳も今は「平和祈念事業特別基金」の方に永久寄贈し、私の手元には複製したものを残している。

第三章 復員後のこと

一、「顔面粉砕、頭部挫創、左鎖骨複雑骨折、右手擦過傷、及び腰部打撲傷」が負傷当時の病名であり、一階級昇進した「陸軍大尉 田代香」の霊名で学校葬まで準備され、仮死状態が続いてい

た。私のために、私と同型のO型の生徒を毎日派遣し、この候補生達から直接採血して輸血してもらい一命を取りとめてもらった。宮崎県は私の復員を待ち受けていて、負傷の身を（特に声帯）多くの人に助けてもらい、定年まで勤めさせてもらった。復員後間もない昭和二十三年一月二十日から県庁に勤務して三十年、退職後も五年間、県の外郭団体に勤務した。実に、ありがたいことである。

【執筆者の紹介】

旧住所

宮崎県宮崎郡木花大字熊野

生年月日

大正八年七月一日

学歴

木花尋常高等小学校を卒業

宮崎農学校を卒業

昭和十四年四月

朝鮮大邱師範学校卒業

軍歴

昭和十四年四月

朝鮮大邱府歩兵八〇連隊入

隊

昭和十六年三月

満州国東京城 第七一飛行
場大隊付

昭和十七年四月

水戸陸軍飛行学校将校学生
として入校

昭和十八年十月

仙台陸軍飛行学校付 将校
学生主任教官

昭和二十年五月

学校本部飛行科付（満州国
海浪飛行場）

昭和二十年十一月

ロシア共和国ラーダ収容所
収容

昭和二十二年十一月

職 歴

昭和二十三年一月

京都市舞鶴港上陸
県庁勤務

昭和五十三年四月

県委託事業勤務（事務長）
退職

昭和五十八年三月

（宮崎県 清家 祝男）

モンゴル抑留生活八〇〇余日

北海道 長 島 秀 夫

万里の長城線警備に発進

昭和二十（一九四五）年七月二十日のことだ、北支派遣軍司令部より私の所属する独立混成第八旅団に対し、満支国境線に進出するよう指令がきた。

ソ連は、二月の米英ソ三国ヤルタ会議において、ドイツの敗北後三か月以内に、対日参戦を約束していたし、四月には、日ソ中立条約の不延長を通告してきていたのでソ連の満州進攻は、必至と考えられていた。

既に満州駐留の関東軍は、ほとんどが南方戦線に動員され、もぬけの殻であったから、結局満州は放棄し、満支国境の万里の長城で、ソ連を阻止する作戦となつたのである。